平成２４年度相双地域医療体験研修（夏期）

～相双は負けない～

実　施　報　告　書

期日：平成２４年９月１２日（水）～１４日（金）

（相馬野馬追：平成 24 年 7 月 28・29・30 日開催）

福島県相双保健福祉事務所

研修概要

９月１２日（水）から１４日（金）の３日間、「地域医療体験研修（夏期）」を双葉郡川内村及び南相馬市において実施しました。

地域医療に関心を持つ医学生１０名の参加を得て、地域医療の現場視察や地域医療に従事する医師との懇談、地域住民との交流を通して、東日本大震災により大きな被害を受けた相双地域について理解を深めるための研修を行いました。

研修日程表

月／日	時間	内容
９／１２（水）	10：30～11：30	オリエンテーション（福島県立医大）
	14：00～16：00	川内村国保診療所視察 地域住民との交流
	16：00～18：00	川内村内見学（天山文庫外）
	18：15～21：00	医療従事者等との懇談会
９／１３（木）	11：00～12：00	スクリーニング体験（相双保健福祉事務所）
	13：00～14：00	小野田病院（南相馬市原町区）視察
	14：30～16：00	仮設住宅住民との交流（南相馬市鹿島区）
	16：30～18：00	課題研究
	18：30～21：00	医療従事者等との懇談会
９／１４（金）	9：30～11：00	課題研究・発表
	11：30～13：00	震災被災地視察（南相馬市小高区）

９月１２日から９月１３日にかけて宿泊した旅館「**小松屋**」

９月１３日から９月１４日にかけて宿泊したホテル「**ふたばや**」

移動に用いた貸し切りバス

９月１２日（水曜日）

オリエンテーション

今回の地域医療体験研修についての趣旨を県立医大大谷准教授より説明いただきました。
（左：大谷准教授）（右：説明を聞く学生）

川内村国保診療所視察・地域住民との交流

川内村国保診療所を見学しました。
（左　：川内村国保診療所のある複合施設「ゆふね」）
（中央：新設予定の眼科診察室で看護師からお話を伺う）
（右　：診察の合間に、佐藤国保診療所長からお話を伺う）

診察に訪れた川内村の住民の方に、震災後病院受診の状況などについてのお話を伺いました。

地域住民との交流

県立医科大学大谷准教授による健康教室に地域住民の皆様と参加しました。

転倒防止の運動などを一緒に行いました。

健康教室を終えた後、３つのグループに分かれて、地域住民の皆様と懇談しました。

震災後の避難生活や川内村の戻られてからの生活などについてのお話を伺いました。

川内村内見学（阿武隈民芸館・天山文庫）

（左：阿武隈民芸館の外観）（右：天山文庫内）

川内村の石井教育長が天山文庫を案内してくださいました。

医療従事者等との懇談会（旅館小松屋）

（遠藤村長のお話を拝聴する学生）

（懇談会の様子）

（遠藤川内村長）

川内村の旅館「小松屋」において、川内村役場幹部及び診療所医師を招いて懇談会を行いました。

はじめに遠藤川内村長から、川内村の復旧復興についてのお話を伺った後、夕食を取りながら川内村の医療や震災後の復旧復興について懇談しました。

９月１３日（木曜日）

放射線被ばくスクリーニング体験（相双保健福祉事務所）

原子力発電所事故の発生以後、相双保健福祉事務所で実施している「放射線被ばくスクリーニング」を体験しました。

当所保健師からスクリーニング検査の実績等の説明を受けた後、屋外のスクリーニング会場で実際に検査を受けました。

（事務所内会議室でスクリーニングについて説明を受ける）

（実際に放射線スクリーニング検査を受ける）

（担当職員からスクリーニングで用いる機材について説明を受ける。）

小野田病院視察

小野田病院（南相馬市原町区）で震災後の病院の対応や地域医療の現状等について、菊地院長からお話を伺いました。

（写真左：左側が菊地院長、右側が林総看護師長）

仮設住宅住民との交流（南相馬市鹿島区　寺内塚合第２）

２班に分かれて仮設住宅でのサロンに参加しました。

血圧測定や懇談を通じて住民の皆様との交流を深めました。

仮設住宅住民との交流（南相馬市鹿島区　小池第１）

課題研究

今回の研修の感想や地域医療従事者に求められることについて、各自まとめを行いました。ここでまとめたことを基にして、翌日の発表を行いました。

医療従事者との懇談会（ホテルふたばや）

（県立医大　大島助教）

（相双保健所　佐々木所長）

（相馬郡医師会　樋口会長）

（懇談会の全景）

相馬市のホテル「ふたばや」において、相馬地域の医療従事者を招いて懇談会を行いました。夕食を取りながら、相馬地域での震災後の医療について懇談しました。

９月１４日（金曜日）

課題研究発表

「今回の研修の感想」や「地域医療に必要とされる医師とは？」などについて、自分で思ったことをスライドを用いて発表しました。

（左：発表について佐々木保健所長より講評を行いました。）

被災地視察（南相馬市小高区）

研修の最後に、バス車中より南相馬市小高区内を視察しました。

南相馬市小高区は、平成２４年４月１６日に原発事故による「警戒区域」が解除され、「避難指示解除準備区域」に指定された地域です。復旧作業が始まって半年と経たないため、震災の影響を色濃く残す地域であり、その惨状を目の当たりにした学生は言葉が出ない様子でした。

（平成 24 年 9 月 14 日　相双保健福祉事務所玄関前にて撮影）

参加した学生の皆様から、感想を頂きました。

- 私がこの研修に参加した理由は３つあります。１つ目は将来地域医療をやりたいから。２つ目は被災地の現状を知りたいから。そして、いろいろな人と出会って自分の世界観を広げたいからです。この３日間で多くのことを学べました。１番刺激を受けたのは川内村の視察でした。村の診療所には常勤の医師は内科医１人、歯科医１人しかいません。大変だろうけど村民全員の健康を自分が守っているということにとてもやりがいを感じるだろうなと思いました。

  そして医師の方々の話題の豊富さには驚きました。懇談会では医学以外のお話もたくさん聞かせてくださいました。住民と打ち解けるためには医学以外の知識もたくさん持っていなければいけないと思いました。

  また川内村の自然の美しさを実感して、「故郷に帰りたい」と思い続けた住民の方々の気持ちもより分かるようになりました。

  私の理想の医師像は、リーダーシップを取りつつも、地域住民の一人として同じ目線で医療をできる医師です。この研修で学んだことを他の学生にも伝えて、福島の医療の現状、そして福島の良さをより多くの人に知ってもらいたいです。

- 今回の地域医療体験研修は、私にとって本当に貴重な体験で、新たに発見したことがいろいろありました。

  私は福島県に来て３年目ですが、実際自分が生活している福島市のことしか知らず、もっと福島のことを知りたいと思ったのがこの研修に応募しようと思ったきっかけです。その中でも、今回の震災や原発の影響で被害も大きく、大変である様子がマスメディアで報道されている相双地区を「今だから見ておきたい」と思いました。

  今回は被災地の状況であったり、地域住民や仮設住宅で暮らす人々との交流であったり、村長さんや保

健福祉事務所の方々との交流であったり……、普通に学生生活を送っていたら体験できないことが沢山あり、私にはそれがとても刺激的であり、魅力的でした。そして、もっといろいろ知りたい、と強く思いました。

今回このような機会を与えてくださった皆様、引率をしながらいろいろ話を聞かせてくれた先生方、学生の私たちに笑顔で話をしてくれた相双地区の皆様、研修を共にした医学生の仲間の方々には、本当に感謝しています。ありがとうございました。

そして、今回学んだことを自分が今後に生かしていけるように、そして今一緒に学ぶ仲間たちにも今回の体験を話したりして、学んだことを共有して切磋琢磨していきたいと思います。

- 私は福島市出身で卒業後は福島で医者として働くつもりでいます。将来働くことになるかもしれない土地はどんなところかをみたいと思って今回の研修に参加しました。

相馬と南相馬は何度か来たことがあって、なじみの深い場所でもありましたが、原発事故により復興が不当に妨げられているのではないかと心配しておりました。実際のところ復興は進んでいるのか、実際に見てみたいということも動機としてありました。

川内村から南相馬市まで移動するのに２時間かかりました。都市部と同等の医療を提供しようと思えば、この交通の不便は大きなハンデになると実感しました。

川内村では整形外科、眼科、心療内科の診療が始まることを知りました。村の医療環境は大いに向上するものと思います。これが散り散りになった村民の帰村を促す大きな契機となることを願ってやみません。

初日の夜は川内村の村長さんのお話を伺う機会を得ました。福島県は今回の震災でとりわけ甚大な被害を蒙り、復興に多くの援助を必要としていることは言うまでもありませんが、単なる補助金の垂れ流しだけでは住民がモラルハザードを起こす恐れがあると、ずいぶん心配されていました。

私は原発の事故が起こるまで、自分の住んでいる町で当たり前の生活を続けていくこと自体が、人間としての誇りを生んでいるのだと言うことに気づきませんでした。原発周辺の地域の人々は、誇りを奪われた状態にあると言って過言はないと思います。そんな中で住民が賠償金に依存し自分の力で生活することを放棄するようになれば、誇りを取り戻す機会を失うのではないか、それが事故に続く第二の喪失をもたらすのではないか、という問題は危惧するべきだと私も感じました。

相双地域の復興についてですが、戻っているところは思った以上に復興していて安心しました。しかしどうしても戻すことのできない部分も目にいたしました。相双地域の生まれ変わりに、医療の面から貢献できたらという思いを強くいたしました。

ありきたりな言い方ですが、地域の医師に求められるのは、地域住民に寄り添って生きることだと思います。そのためにまず必要なのは、どんな人がどんなところに住んでいて何を考えながら何をして暮らしているのかということを想像することだと思います。今回の研修では、その点に実際に触れて想像する機会を得ることが出来ました。関係者の皆様に御礼申し上げます。

- 私自身、東日本大震災の発生時には福島市内にいたので、震災や原発事故による混乱を経験したつもりでいました。しかし、事故後に一時避難区域となった地域を訪れたり、仮設住宅にお邪魔して住民の方々から直接お話を伺ったりするのは今回が初めてでした。住民の方々は一見気丈に話されていましたが、津波で家を失った、今は家族と離れて生活している、放射能汚染が不安である、やっぱり生まれ育った「ふくしま」が良い、といった生の声に接し、改めて震災が与えた影響の大きさを痛感させられました。

同時に、震災後の厳しい状況の中でも、地域住民に寄り添ってきた医療従事者の方々のお話を聞き、果たして自分には住民の生活を陰で支えるという気概はあるのだろうかと、考えさせられました。３日間を通して貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

- 私が本研修に参加した理由は２つあります。１つは、地域医療、特に過疎地の医療に興味があったこと。２つは、被災地の現状を見ておきたかったことです。

まず、今回訪問させていただいた川内村の国保診療所で聞いた患者さんの話の中には診療所のおかげで安心して生活できるという感謝の言葉を多く聞くことが出来ました。そして、印象に残った言葉に、より多くの人に帰村してもらうには食料と医療という２つのライフラインの充実が必要だという患者さんの言葉があったのですが、その言葉のとおりに、南相馬市の小野田病院が行なった復興についての調査においても、子供達などの若い世代に帰ってきてもらうために大切なことには”医療・福祉の充実”がありました。過疎化の進む地方において、どれだけ地域医療が重要であるか、改めて再確認することが出来ました。

つぎに、診療所や仮設住宅の被災者の方々は、どなたも元気で前向きであることが心に強く残っています。前向きに生きることは、心身共によい影響をもたらしますが、実際には、被災者の方は前向きに見えても心に傷があると思うので、医師は、被災者の方々がつらい気持ちをしまい込まないように、心の傷のケアをすることも大切な仕事なのではないかと思っています。

最後に、３日目の被災地視察では、津波の被害を感じさせる中にも、復興に向かいつつある様子をうかがうことができ、現状を理解できました。がれきなどはほとんど片付いていたので、一見すると元々大きな更地だったかのように思える現場は、昔の町の様子を知る人たちにとっては、耐え難い悲惨な状況なのだと思います。町を一から再構築する作業には、多くの時間と労力がかかりますが、被災地の現状を見た今では、今まで以上に”復興”への思いが高まるのを感じました。

今回の２泊３日の研修は、短いながらも多くのことを学ぶことが出来、大変勉強になりました。また３年生になったときに再び参加できればと思います。

- 実際に患者さんや住民さんの生の声を聞くのは何よりもリアルでした。テレビなどのメディアからは得られないものがほとんどで良い機会をもらえたなあと思いました。子供が戻れる環境をつくるのに医療の充実が欠かせない、と医療従事者の方から聞きましたし、小野田病院の院長先生からいただいたアンケート結果からも明らかでした。医師不足の地域で医療を充実させるのは大変だと思います。けれど先生達はそれに答えようと医療施設の機能分担など新しいことに挑戦していってすごいと思いました。

また、課題研究のテーマだった「地域医療に必要とされる医師とは？」というので自分なりにぎりぎりですが答えを出してみました。３つあげた内の１つに「話を聞ける医師」というのをあげました。仮設住宅の人に質問したらそう答えてくれました。地域医療ではその地域と住民と接しながら作り上げていくもので、その住民の話に耳を傾けることが重要だと思います。また、患者さんは不安を抱えて病院に来るわけで、話を聞いてもらうだけでも不安は取り除かれるのでとても大切だと思います。

他の人の発表を聞いていると、自分の意見がすごく幼稚というか、そんな思いがしました。３年生や６年生の考えはやっぱりすごくて、とても参考になりました。

どの意見も豊富な知識や高い技術力の上に成り立つものですよね。だから、今の自分に出来ることは、ボランティアをしたり、やっぱり勉強だよな、と思いました。（苦笑）今回の研修は地域医療・災害医療についての関心が高まり、勉強する気も出てきました。実際に参加するのと、誰かの話を聞くのではこんなに違うんですね。まさに、「百聞は一見に如かず」だなあ。

良い体験をしました。ありがとうございました。

平成２４年度　　平成２４年９月

地域医療体験研修（夏期）実施報告

編集・発行

福島県相双保健福祉事務所　総務企画部総務企画課

〒975-0031　南相馬市原町区錦町１丁目３０番地

電　話　0244-26-1326

ＦＡＸ　0244-26-1332

http://www.pref.fukushima.jp/sosohofuku/

E-mail:sousou.hokenfukushi@pref.fukushima.lg.jp